

# —ウツペツ川とオホーツナイ川(下)—

前回は、川村力子トエカシのウツペツ川とオホーツナイ川についての見解を紹介した。今回は、明治三十一年に札幌で生まれ、明治二十六年に「近文原野才オホツナイ(現・大町一条八丁目付近)」に移住した旭川の郷土史家のリーダーだった斎藤讓三は、次のように述べている。

オオホツナイ(崖を曲流する川)は、川村力子トエカシの「このウツはぐるぐる廻っている川」はほぼ同意であり、斎藤讓三が、「ウツペツは、水質は鉄分を含んで赤く」と、川村力子トエカシの「鉄分を含んで濁つて」いるは共通している。

また、松浦武四郎と永田方正の記録に、フウレペツ(hure-pet 赤い川)、フウレメム(hure-mem 赤い池)があるが、斎藤讓三が指摘するように、鉄分を含んだ赤い川と池があつたことが推測される。地図②は、明治四十三年の『北海道仮製五万分1図』である。斎藤讓三が

に近く水質は鉄分を含んで赤く、マンガン鉱石が見られる。(昭和三十年「郷土のむかし」)

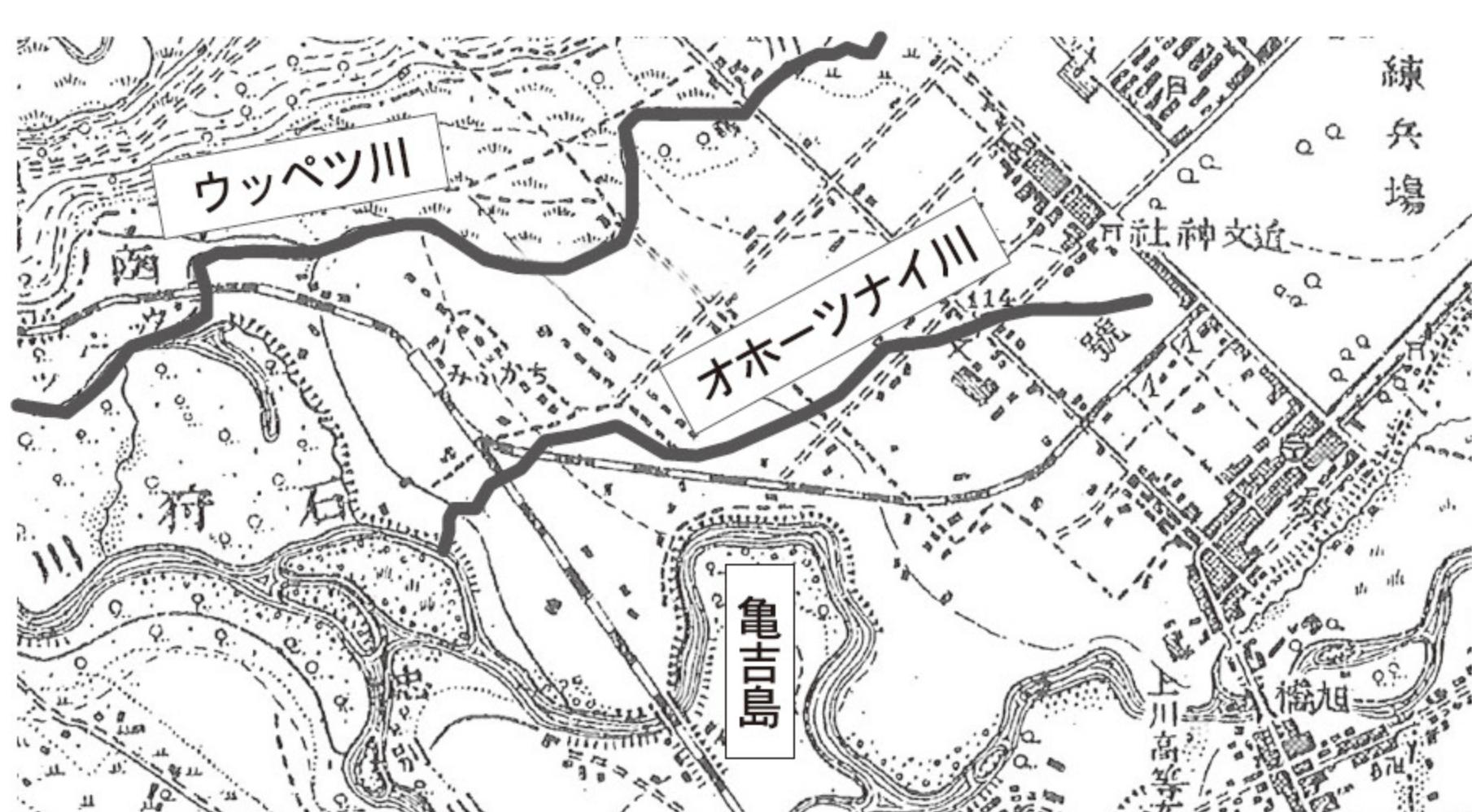
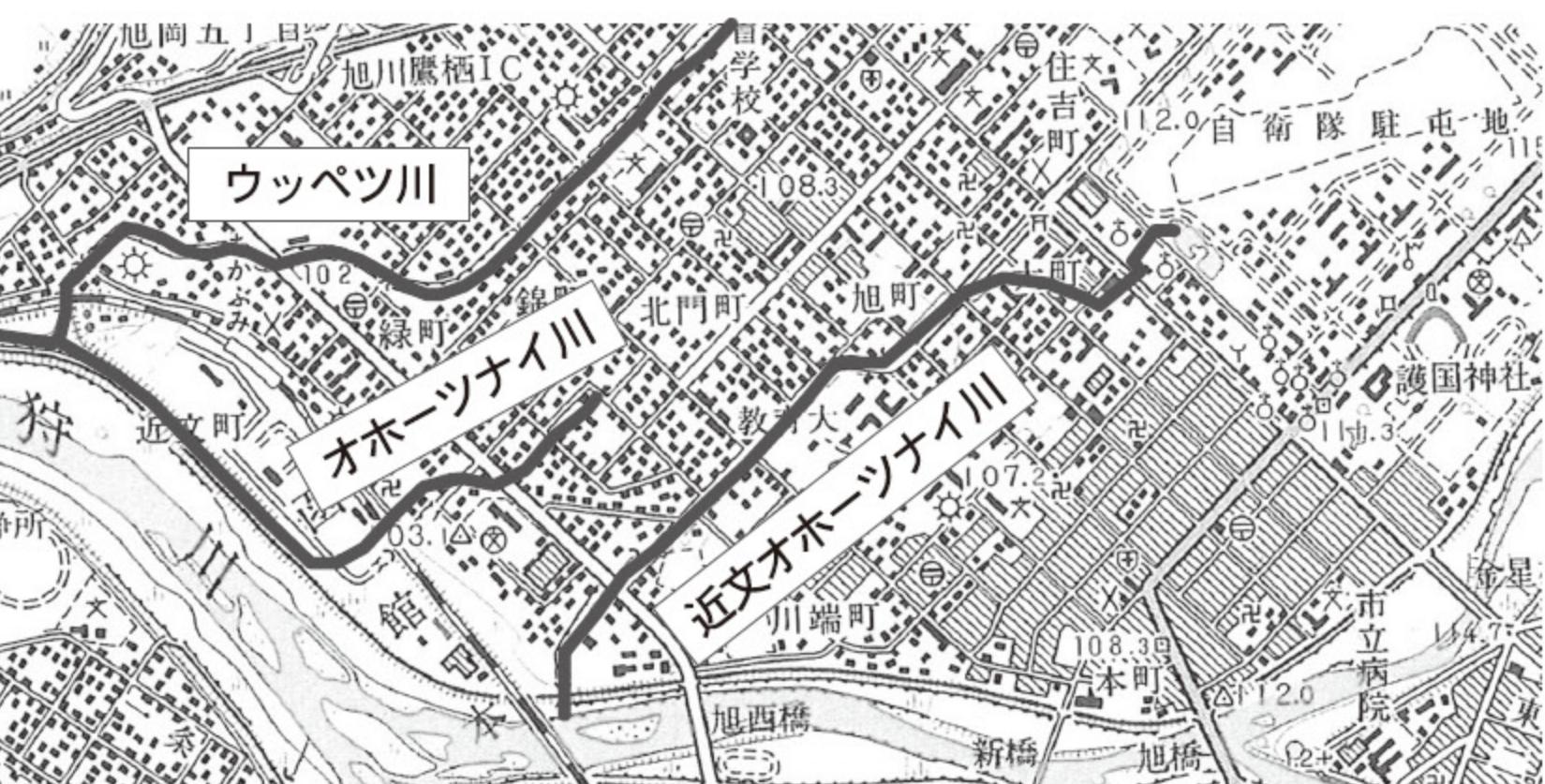
斎藤讓三の「オオホツナイ(崖を曲流する川)」と、川村力子トエカシの「このウツはぐるぐる廻っている川」はほぼ同意であり、斎藤讓三が、「ウツペツは、水質は鉄分を含んで赤く」と、川村力子トエカシの「鉄分を含んで濁つて」いるは共通している。

さて、地図①の「オホーツナイ(o-ho-ut-nay)深い・肋骨・川」は、明治三十一年の『北海道仮製五万分1図』では、現在の大町一条十二丁目まで続いている。そこには、大町近文神社(現・金刀比羅神社)横の崖岸は、現在も残り、それが近が水源となっている。ものと思われる。地図②では、第七師団付近が水源となっている。

ところが、地図②の石狩川の蛇行部分の「亀吉島」の旧流部分が、昭和四十一年に近文オホーツナイ川となる時に、オホーツナイ川の上流部分を切り替えて、近文オホーツナイ川へ流したのである。しかも、近文オホーツナイ川は、地図①では

ウツペツ(瀬の川)左右の山麓にかけ湿地が多く、大木の密林であつて、南は廃川となり跡地の湿地をなしている。ウツペツ(瀬の川)左の山麓にかけ湿地が多く、大木の密林であつて、南は廃川となり跡地の湿地をなしている。ウツペツ(瀬の川)左の山麓にかけ湿地が多く、大木の密林であつて、南は廃川となり跡地の湿地をなしている。

地図① 平成12年—5万分1地形図



地図② 明治43年改版—『北海道仮製5万分1図』

軍用よりも木材貨物専用線としての性格が大きかった。戦後の昭和二十一年一月十五日には貨物駅として旭川大町駅が設置された。しかし、この引込線は、昭和五十三年十月一日に廃止されて、現在線路跡は、「北の散歩道」の名称の遊歩道になつてている。

(アイヌ語地名研究会幹事)

148

高橋 基

## 断章 旭川のアイヌ語 地名研究